

---

# 狂剣

るうね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂剣

### 【Nコード】

N7762G

### 【作者名】

るつね

### 【あらすじ】

池田屋以来、沖田の剣が変わった……。

池田屋で倒れて以来、沖田の剣が変わった。

以前はどこか無邪気な太刀筋であった。竹刀の稽古で相手を打ち据えるのと同じような感覚で、人を斬っていた。現在は違いまう。殺そうとして殺している。斬った後、浮かべる笑みも、無邪気なものから、愉悦のそれに変わっていた。

もつとも、端から見て取れる変化はごくわずかで、そのことに気付いている者は少なかった。

永倉は気付いていた。多分、近藤や土方も気付いていたろう。

何度、隊を離れて養生したらどうかと勧めたか知れない。その時は素直に話を聞いているのだが、一向に休む気配はなかった。むしろ、池田屋以前より、街を巡廻する回数は増えているくらいである。非番の時も、巡廻に付いて来ることがしばしばだった。

そして、斬る。不逞浪士ふていろうしたちを見かければ、無造作に近づいていき、誰何の声もそこそこに、あっさりと斬り捨てる。

斬りすぎだぞ。

土方が、そう沖田に言つて諭しているのを、永倉は何度か見かけたことがある。鬼の副長をして、沖田の斬り癖きせきは異常に映つたものらしい。それでも、沖田は人を斬ることをやめない。これを嫌悪、いや憎悪していたのが総長の山南である。もともとは剣客というより論客としての気質の強い人物であった。そんな彼にしてみれば、沖田の行状は狂気の沙汰としか見えなかったのであろう。

元治二年（一八六五年）二月、山南は隊を脱走した。この討手に沖田が名乗り出た。近藤、土方、ともに嫌な顔をした。とはいえ、他に人がいない。山南敬助。北辰一刀流の達人である。隊でも、その剣技に比肩する者は数人だろう。また、試衛館以来の生え抜きで

あり、新撰組の幹部でもある。下手に首を突っ込んで、火の粉を被る酔狂者など、そうはいない。

とはいえ。

「永倉君。頼めまいか」

土方が言う。

山南が沖田を毛嫌いしているのは、誰の目にも明らかだ。二人を接触させれば、どんな面倒ごとが起きるかも分からない。それは永倉も理解していた。が、不運なことに、この時、永倉は風邪を引いていた。

「申し訳ないが……」

断る。

そうになると、もう沖田しかいない。斉藤でもいいが、今は別の任についており、そちらに集中させたいというのが本音だ。

「総司、斬るなよ」

「分かってますよ、土方さん」

そう言って、沖田は馬を駆って出発した。

戻ってきた時には、山南の首を脇に提げていた。

「すみません、抵抗されたもので、つい」

と言って、笑う。全身が血まみれだ。山南の返り血だろう。沖田自身には傷一つない。

近藤も土方も苦りきった顔をしている。脱走者は処刑。そう決まってはいるが、山南は腐っても新撰組幹部だ。それを問答無用に路傍で斬り捨てた。やりすぎ、である。

「切腹、ということにしよう」

土方が、どこか疲れた声で言う。

結局、山南は捕縛された後、屯所内で切腹した、ということにされた。ほとんどの隊士は、真実を知っていた。

このことが、新撰組分派の呼び水となったことは否定できない。

慶応三年（一八六七年）三月、参謀の伊東甲子太郎を中心とする一団が、禁裏御陵衛士きんりしりょうゑんしの役を拝命し、新撰組から分派した。もともと伊東は勤皇の思想が強く、あくまで佐幕を貫こうとする近藤とは反りが合わなかったのだ。この分派の際、試衛館以来の生え抜き隊士の藤堂平助も隊を脱している。

伊東が暗殺されたのは、同年十一月十八日。まず油小路を無用心にも従者一人しか伴わずに歩いてきた伊東を、永倉、そして沖田を含む隊士数名が殺害。その死体を取りに来るであろう御陵衛士たちを一網打尽にする計画であった。その標的には、藤堂も入っている。予想通り、駆けつけてきた御陵衛士たちを、新撰組は落ち着いて迎え撃った。御陵衛士たちは一人、また一人と斃たおされていく。何人かは逃げ散り、とうとうあと一人となった。

藤堂平助。

永倉と原田、二人を相手に一步も退かない。永倉は何度か隙を見せ、藤堂を逃がそうとした。原田も同様。近藤から、できれば平助は助けてやってくれ、と頼まれている。とはいえ、彼自身が逃げるつもりがなければ、どうしようもない。

そこに。

「平助」

声がかかる。沖田。

「僕と一騎打ちをしないか」

「一騎打ち？」

問う藤堂に、沖田はうなずき、

「僕是新撰組一番隊組長だ。そして山南さんを殺した人間でもある。僕を斃たおせば、君の面目も保てるだろう。その場合、君の命も助けよう。いいですね、永倉さん、原田さん」

永倉は言葉に詰まった。たしかに、このままでは埒が明かない。とはいえ、素直に沖田の提案を認めてよいものか……。

「いいだろう」

永倉が腹を決める前に、藤堂が言った。

「その一騎打ち、受けよう」  
「では」

沖田と藤堂、双方が構えを取る。藤堂は正眼。対して沖田は……構えらしい構えを取っていない。無形、とでも言えばいいのか、両腕をだらりと下げ、右手に持つ刀をゆらゆらと揺らしている。

舐<sup>な</sup>めている。永倉はそう思った。藤堂も同じだったのだろう。憤怒の形相で、踏み込み　藤堂の両手首が飛んだ。永倉には、かろうじて見えた。藤堂が踏み込んだ瞬間、沖田が、それ以上に大きく踏み込み、刀を跳ね上げたのだ。凄まじい速度。相対していた藤堂の目には、残像すら映らなかつたろう。藤堂はきよとん、としている。そこに沖田の突き。藤堂の喉<sup>のど</sup>笛<sup>がえ</sup>を貫いた。血煙を残し、藤堂が倒れる。二、三度痙攣<sup>ちがすみ</sup>して、動かなくなつた。

沖田は、笑っている。血霞<sup>ちがすみ</sup>の中、淡く微笑んでいた。

沖田の病状が悪化した。労咳である。立つこともままならず、絶えず咳を繰り返す。三日に一度は血を吐いた。近藤らは、半ば強引に沖田を大坂へ護送することと決めた。この時、すでに大政奉還が成り、徳川慶喜は大坂に身を移している。

「永倉さん」

護送される前日、見舞つた永倉に沖田は自身の差料を差し出した。菊一文字。

「これを、預かっただけですか」

「俺に？」

「はい」

「局長か副長に頼めばいいだろう」

「いえ」

沖田はかぶりを振る。

「あの人たちでは近すぎます」

何の距離なのか。沖田は口にしなかつた。永倉も問わず、黙って

菊一文字を受け取った。

沖田が護送されて、一ヶ月もしないうちに、幕軍と薩長の戦争が勃発。いわゆる鳥羽伏見の戦いである。これに幕軍は負けた。新撰組も井上源三郎をはじめ、多くの隊士が戦死し、生き残った者たちは、海路、江戸へ退きあげた。この時、永倉と沖田は顔を合わせていない。沖田は病が篤く、<sup>あつ</sup>寝所から動ける状態ではなかったし、永倉も疲れていた。

永倉が近藤たちと袂を別つたのは慶応四年（明治元年）の三月のことである。江戸へ帰ってからの近藤には、これまでのような覇気がなかった。永倉が会津に向かうことを提案した時、これまでなら即断したであろうところを、さんざん迷った末、

「君たちが、自分の家来になるならばそれもよいが、そうでなければお断りする。」

と言った。

それで永倉は冷めた。

試衛館時代から、近藤は常に皆のまとめ役だった。何も言わずとも、常に近藤が中心となる。主従が自然に定まっていたのだ。それが、「家来になれ」と言う。主と家来、言葉にしなれば、それが定まらないほど、近藤の人的魅力が薄れたことの証左だった。

四月、近藤が新政府軍（官軍）に投降、処刑されたことを風の噂で聞いた。だから、というわけではないが、永倉は沖田を見舞おうという気になった。江戸に戻ってからの沖田は、千駄ヶ谷の植木職人、柴田平五郎の離れで療養している。

晴れの日であった。

吹き抜ける風に、新緑の香りが混じっている。

永倉が訪ねた時、家人は誰もおらず、沖田が一人で寝ていた。

「来てくれましたか」

身を起しながら、言う。

「預かりものを返しにきた」

永倉は、菊一文字を差し出した。沖田は受け取り、鞘から抜いて刀身を眺めた。

「手入れしてくださってたんですね」

「大事な預かりものだからな」

「では、始めましょうか」

沖田は立ち上がる。「何を」とは永倉も訊かない。

「身体の方は大丈夫なのか」

「今日は、不思議と気分がいいんです」

沖田は、そう答え、羽毛のように、軽い、というよりは、頼りない足取りで庭に向かった。永倉も続く。

「やあ、猫だ」

明るく、沖田。庭の一隅に、黒猫が座っている。沖田は抜き身の刀を手に提げたまま、黒猫に近づいていった。

「よせ」

永倉が声と殺気で沖田を止める。

「そんな猫<sup>もの</sup>を斬っても仕方あるまい」

「試し斬りには、ちょうどいいと思ったんですが」

まあ、永倉さんがそうまで言うなら、やめておきましょう、と沖田は永倉に向き直った。

「やりますか」

「ああ」

永倉は刀を抜き、構える。正眼。沖田は構えない。いや、あれが構えなのだ。無形。

奇しくも。

永倉は大きく踏み込む。沖田の姿が揺れた。

刀が飛ぶ。菊一文字。

永倉の刀は、沖田の腹に深々と突き刺さっていた。

「平助の時に、一度、見せてもらっていたからな」

「一本……取られましたね」

沖田は膝から崩れ落ちた。

「沖田」

「あ、ありがとうございます。永倉、さん」  
震える唇で、沖田は言葉を紡ぐ。

「ぼ、僕は、病でなく、刀で死にたかった」  
「分かっていたよ」

沖田は、ふ、と笑い、そして逝った。

永倉は、沖田の身体を抱え、寝所へ運んだ。軽かった。

蒲団ふとんをかけてやり、脇に菊一文字を置く。そして、その場を後にした。

どこかで猫の鳴き声がした。

歩きながら、思う。

多分、怖かったのだ、沖田は。身も心も、病による緩慢な「死」に侵食されていくことが。だから、人を斬った。死を与える側になることで、生の実感を得る。労咳とは別の、精神こころの病であつたらう。だとすれば。

俺とあいつで、どれほどの差があるというのだらう。

さまざまな「死」を見てきた。敵だけでなく、味方のものも。それに触れている時、たしかにあつた。生の実感、と呼べるものが。その点、沖田と何ら変わりない。一歩間違えれば、俺があいつのようになつていたかもしれない。あれは、俺の分身、俺が為り得たもう一つの姿だ。

ふと、永倉は道を外れ、川べりに降りて行つた。腰の大小を外す。そして、大きく川へ投げ込んだ。ぶくぶく、と泡を立て沈んでいく。沈みきるのを待つことなく、永倉は川に背を向け、歩き出した。

永倉新八は、七十六まで生きた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7762g/>

---

狂剣

2010年10月8日15時02分発行